他地域への依存度が強いのは通勤・通学だけでなく，商業についても同様である。当地域内では田無市だけが他市からの購買力の流入が見られるが，田無市以外では副都心や立川・所沢などへの流出がかなり多い。そうした商業の実態をつかむために東村山市の21の商店街を商店街規模と業種構成により分類し，分類別にその性格を分析してみた。しかし，東村山市の商業全体が結局は住宅環境の一部として発展してきたため，分類ごとの明確な相違は現れなかった。つまり商圏は狭く日常生活を充足させる程度の商店街がほとんどではあるが，ほぼ全市域を商圏とし，より多様な買回品をも充足させる核的な商店街も久米川駅の周辺に存在して，やや立体的な商業環境を形づくっていると言える。

佐賀平野北西部の農業地理学的考察

羽　田　京　子

私が，地理学の中で特に農業地理学の分野を卒論の対象の中心にしたのは，社会的な農業の地位の低下に興味をひかれていたという前提によっている。日本の社会情勢が含む問題の中で，農業についてはそれが人間の生活に不可欠の産業であるのに，行政面で立ち遅れ，近代的産業としての体系をなかなか取得できないでいる事は，農村に生活したことのない私にとっても心配事であった訳である。現在自宅が福岡にあるので，日本では先進地域に入る佐賀平野を，地の利を生かしてフィールドに決定した。

佐賀平野の農業を考えると，まづ農業用水は，意外に筑後川ではなく中河川嘉瀬川に依るところが多い。幸い佐賀平野については数々の研究があり，この嘉瀬川の作る扇状地の農業を，以南の筑後川の氾濫原と比較しながら明確にし，土地の環境が農業の経営にどんな影響を与えるのか－その一端を明らかにしてみようというのが，卒論の目的である。

調査にあたって，文献は教室で入手できるものと，佐賀県立図書館郷土資料室に入っているもの，及び地元の出版社からの研究書を主に使用し，県庁・市役所・農協等での話と地元の郷土研究家の人々の話・フィールドでの聞き取り調査を参考にして，統計を処理した。

次に卒論の要旨を述べてみる。

フィールドは題目が示すように佐賀平野の北西部で，背後の山地と筑後川の氾濫原の中間地域である嘉瀬川の扇状地及び山麓を占めている。南の氾濫原は，土地が平坦で，水利施設も整い，大型機械導入の圃場整備が進んでいて，特に稲作の近代化に意欲的で，全国でも有数の高生産力地域－土地生産性・労働生産性とも－を形成している。これに対し，佐賀平野として一括して述べられているが，フィールドは，平野内後進地域に属している。地形は移行部であるために傾斜があって圃場整備しにくいし，土壌は粘土質の氾濫原に比して扇状地性で生産力が劣っている。又，灌漑用水は，地形を利用して佐賀平野への取水・配水施設の建設地ではあるが，フィールド自身がその恩恵を受けることが少なく，現在進行中の水利事業の完成を待っているような地域である。このような環境の違いを考えて農業経営の状態を比較してみると，水田が小規模で，機械化も遅れ，生産力の低いフィールドの農家は，最近特に成長した佐賀市の都市機能への兼業－特に第二種兼業を余儀なくされているのに対し，

平担で生産力の高い氾濫原の農家は，余剰労働力を軽い兼業にとどめ，農業上は稲の単作に近い状態となっている。この劣性をカバーする意味を含めて，フィールドでは，土地利用に適したみかんを導入した。一時水田にまで進出したみかん栽培は，現在高度成長から安定成長に変ってはいるが，地域の基幹作目として水稲と並び称されるまでになった。又，都市近郊であるために，施設野菜・花卉等の園芸作物栽培と，畜産（乳牛・豚・鶏）がのびつつあって，大都市の近郊にみられるような近郊農村としての性格を，稲生産力の低さ故に小規模ながら獲得しようとしていると言えそうである。

以上，佐賀平野内での地域性に加えて，フィールド内の地域差についても考察してみたが，フィールド内の地域差は，自然的環境に加えて，都市的発達や行政区分の相違（佐賀市と佐賀郡に二分される）が反映しているように思われた。

桜島火山の地理学的考察

―桜島町の農業を中心にして―

原　口　和　子

(1)　目的

桜島は，鹿児島湾北部，鹿児島市の対岸約3Kmに位置する日本の代表的活火山である。姶良カルデラの中央火口丘として形成され，有史以来30余回の噴火が記録されている。中でも最大といわれる文明年間（1471～1476）・安永8年（1779）・大正3年（1914）及び昭和21年の噴火で流出した溶岩は，島の面積の43％を覆っている。桜島南岳は現在も活動を続けており，特に昭和47年10月以降は，その活動が活発化しているため，降灰による被害が相次いでいる。桜島における人文現象は，その火山活動によって大きく制約されていると思われる。そこで，活火山という動きつつある特殊な自然環境の中で，どのような人文現象が見られ，それがどのように変化しているかということをとらえ，自然と人文のかかわりを明らかにしたいと考えた。

(2)　方法

自然及び人文条件から，桜島の集落を北西部・南部・東部の3地域に区分した。さらに，桜島の代表的農業地域である桜島町（北西部）の農業について考察した。中でも昭和47年以降の降灰による被害に重点を置き，火山活動の農業に与える影響を明らかにしようと試みた。

(3)　結果

桜島では，常流河川がないため，水田は皆無で果樹栽培が農業の中心である。集落は，地下水の得られる海岸地帯に限られており，火山扇状地のある西半分では発達しているが，溶岩地帯である東部ではあまり発達していない。また，集落は次の3地区に区分できる。

1. 北西部……火山扇状地が発達し，みかんを中心にびわ，桜島大根などが栽培される果樹地帯である。
2. 南　部……降灰・鉄砲水などの被害を受けやすく，耕地も狭い。普通畑が多く，畜産が行なわれ，果樹ではびわが多い。
3. 東　部……溶岩地帯で降灰も最も多い。戦後の開拓村であり，農業も非常に零細である。